様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６２０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７００

研究課題名（和文）英語のライティングとスピーキングにおける感情表現―学習者と母語話者の比較―

研究課題名（英文）Emotional expressions in English writing and speaking: Comparison between Japanese learners and native speakers of English

研究代表者
金子　育世（KANEKO, Ikuyo）

順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授

研究者番号：００３６０１１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,200,000円、（間接経費）　660,000円

研究成果の概要（和文）：日本人英語学習者のライティングとスピーキングにおける感情表現の習得度を観測し、母語話者と比較した。ライティングにおいて熟達度とTOEICスコアの相関関係や感情表現の習得度とTOEICのスコアの相関関係を示唆する傾向が、スピーキングにおいてプロソディの中でもピッチの重要性を示唆する傾向が観測された。
　また、日本人学習者による英文手紙と和文手紙に対しアプレイザル分析を行い、英語と日本語における感情表現の言語特性を観測、比較し、第二言語の生成能力に対する第一言語の関与について感情表現の習得という観点から検討した。同一被験者による感情表現であっても第一言語と第二言語において異なる言語特性が示された。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the degree of acquisition of emotional expressions in writing and speaking by Japanese learners of English. The results of the comparison between Japanese learners and native speakers of English indicated relations among the writing proficiency, the degree of acquisition of emotional expressions, and the TOEIC scores. It was also observed that the usage of pitch may be a key to better emotional expressions in speaking by Japanese learners of English. This study also analyzed letters written in Japanese (L1) and English (L2) by Japanese learners of English by adopting Appraisal theory as a framework. The results showed different linguistic features of the letters written in English and those in Japanese respectively, although written by the same students.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：感情表現　日本人英語学習者　第二言語習得　ライティング　スピーキング　発表的技能

１．研究開始当初の背景

言語活動の重要な役割の１つとして「感情の伝達」が挙げられることからも明らかなように、言語において感情表現は重要な要素である。しかしながら、日本人は外国人と比べ一般的に感情を表すのが得意ではないと見なされている。また、謙遜や沈黙は美徳であり、饒舌は慎みがなく信用されないと教えられてきた日本人にとって、感情を豊かに表現することは日本語であっても英語であっても容易ではないと考えられる。特に英語の感情表現は学校教育で体系的に教えられていないため、日本人が苦手とする表現の１つである（上地＆谷沢、2004）。本研究では、日本人英語学習者による感情表現の習得に着目し、発表的技能(productive skill)であるライティングとスピーキングにおいて習得を困難にしている要因を実験的手法を用いて明確にし、英語教育への応用を図りたいと考える。

第二言語（L2）によるライティングの研究は、多くの移民と留学生を受け入れてきた米国で盛んに行われてきており、L2 によって産出された文章（テキスト）の分析（プロダクト研究）と、作文産出プロセスやストラテジーの研究の 2 種に大きく分けられる。プロダクト研究については、第二言語学習者の誤用に関する研究とその誤りに対するフィードバックの研究が多くを占め、レトリックパターンや談話モード（「説得するための文章」や「説明するための文章」などのように、違った特質や文体を持った文章の型）に関する研究は少なく、特に感情表現の習得に着目した研究は殆どなされていない。日本の L2 ライティング研究は米国の影響を強く受けているが、米国での研究から得られる知見が事情の異なる日本の英語教育にどの程度応用できるのかは明らかではない（小室、2001、大井、2004）。また、日本の研究の中心は従来から指導法に関する主張が主流であり、実証的研究は多くなされていない。数少ない実証的研究においても、そのほとんどが英語圏の大学などで必要とされるアカデミック・ライティングやパラグラフ・ライティングを対象としたもので、手紙などの社会的なやりとりを対象とした研究は十分になされていない。

スピーキングにおいて、話し手の意図は語彙情報だけでなく感情音声を構成するプロソディ（感情的プロソディ）によって伝達される。コミュニケーションを成立させるためには、聞き手が話し手から発せられた語句からだけでなく感情的プロソディからも、話し手の真の意図を正しく理解しなければならない。話し手と聞き手が同じ言語文化を共有している場合は比較的高い確率で感情音声が正しく認識されることが様々な研究において明らかになっている（Laver, 1980, Mazo et, al, 1995, Maekawa, 1998, Sadanobu, 2004, Fujimura & Erickson, 2004, 他）が、非母語話者には異なる解釈をされコミュニケーション上に障害が生じたり、話者と同じ文化を共有しない聞き手の誤解や怒り、混乱を招いたりする危険性がある（Amir et al, 2004, エリクソン＆昇地、2006）。

感情的プロソディはオーラルコミュニケーションにおいて重要な非言語要素であり、精神医学やスピーチ・サイエンスの分野において活発に研究が行われている（Van der Meulen, Jansen, & Os, 1997, Schirmer & Kotz, 2002, Imaizumi et al, 2004, Shochi et al, 2005, 他）。しかしながら、多くの研究は知覚面に関するものであり、第二言語習得や外国語教育の分野における研究は著しく不足していて、十分な成果が得られていない。

平成 20 年度および 21 年度科学研究費補助金若手研究(B)（課題番号 20720153）において、日本人による英語の感情表現とその習得過程を観測するため、ライティングとスピーキングにおいて生成実験を実施した。感情の中でも「愛情」と「哀悼」という 2 種に着目し、感情表現が自然な形で多く使用されると考えられる「手紙」という形式を用いた。ライティングにおいては、被験者全員に同じ条件下でラブレターとお悔やみの手紙を書かせ、日本人被験者の手紙と英語母語話者の手紙とを比較した。手紙の長さ（文字数）、使用されている構文の複雑さ、手紙のパターン等を分析した結果、日本人被験者において感情表現の習得度と TOEIC スコアの高い相関関係、英語母語話者による手紙とは異なる英文のパターンが観測された。スピーキングにおいては、ラブレターとお悔やみの手紙をテープレターにするつもりで日本人被験者と米語母語話者に読ませ、録音した。録音した音声の音声波形、スペクトログラム、イントネーションカーブを作成し、3 種類に分類した分析語のピッチ高低差、持続時間、強度を計測した。結果として、日本人被験者の感情的プロソディは米語母語話者のものに比べてピッチ高低差が少なく、持続時間が短く、強度が高いことが観測された。このことから、日本人英語学習者はピッチ高低差と持続時間の不足部分を強度で補おうとしていることが示唆された。また、日本人被験者の男性と女性を比較した結果、女性は男性に比べピッチ高低差が大きく、持続時間が長いことが観測され、女性の方が男性よりも感情表現が豊かであることが示唆された。

本研究では、上記の研究で得られた成果を踏まえ、日本人英語学習者における感情の種類と感情表現の習得度の関係に着目し、表現する感情の種類によって表現の習得度に差異が観測されるのかについて、検討・分析を試みた。また、日本人英語学習者の日本語と英語を比較し、第二言語である英語の生成能力に対する第一言語である日本語の関与について、感情表現の習得という観点から検討した。

２．研究の目的

本研究の目的は、(1) 日本人英語学習者における感情の種類と感情表現の習得度の関係（感情の種類によって表現の習得度に差異が観測されるのか）を検討・分析すること、(2) 日本人英語学習者の L1（日本語）と L2（英語）を比較し、L2 の生成能力に対する L1 の関与を感情表現の習得という観点から検討すること、の 2 点であった。

３．研究の方法

(1) ライティング実験

日本人英語学習者の英語ライティングにおける感情表現とその習得過程を観測し、感情表現の習得と TOEIC により測定される英語能力との相関関係を検討するため、生成（作文）実験を実施した。感情の中でも「懇願」と「不満」の 2 種類に着目し、それぞれの感情の表現が日本語と英語でどのように異なるかを観測するため、2 つの課題を用意した。課題 1 は「大学の授業料が急に払えなくなり、大学に在籍し続けるために借金を懇願する手紙」とし、課題 2 は「不親切なスタッフがいることについて、図書館に対して苦情を伝える手紙」とした。

本実験の被験者として海外滞在経験のない日本人大学生と英語母語話者を用意した。日本人被験者については、上記の課題にもとづき 2 種類の手紙を 4 回のセッションに分けて、日本語と英語でライティングを行った。L1 による作文の影響を排除するために、被験者はまず英語（L2）による作文を行い、その 1 週間後に日本語（L1）による作文を行った。ライティングの所要時間には特に制限を設けず、必要であれば辞書の使用も許可し、余分な緊張感のない環境でライティングができるように配慮した。米国人被験者については、2 回のセッションで同じ課題にもとづく 2 種類の手紙を英語で作成した。

手紙の長さ（文字数）、感情表現を中心とした使用語句の難易度、構文の複雑さ、手紙のパターン等を分析し、米語母語話者のものと比較した。また、Martin & White (2005) によって提案されたアプレイザル理論を用いた分析も行い、日本人英語学習者と英語母語話者の感情表現の言語特性を機能言語学の観点から比較、検討した。

ライティング実験で生成された文字言語資料を分析するため、本研究では T-unit (minimal terminable unit)とアプレイザル分析（Appraisal analysis）を採用した。アプレイザル分析は、選択体系機能言語学（systemic functional linguistics）の代表的な理論の１つであるアプレイザル理論（Appraisal Theory）を枠組みとしたもので、主にオーストラリアで盛んに行われてきた。話し手または書き手の意見や考え、評価を表現する際に言語がどのように使用されているかを観測するための分析手法であり、感情や情緒的な価値を示す表現（評価表現）を極性（肯定的か否定的か）や評価基準（感情に関する基準や倫理に関する基準など）に基づいて評価することで、テキストを構成する要素の言語特性を観測することができる。

(2) スピーキング実験

日本人英語学習者のスピーキングにおける感情的プロソディとその習得過程を観測するため、生成実験を実施した。前述したライティングの実験で収集した資料から感情表現を含んだ文章（テキスト）を選び、日本人被験者と米国人被験者それぞれに音読させ、録音した。この際、ただ機械的に繰り返すのではなく、自然なスピードと発音で読ませた。日本人被験者は英文テキストと和文テキストの 2 種類を、米国人被験者は英文テキストのみを読んだ。

全被験者の音声資料において、音声波形、スペクトログラム、イントネーションカーブを作成し、英語母語話者が強調している語・節を分析語として特定した。分析語のピッチ高低差、持続時間、強度を計測し、日本人被験者の音声と英語母語話者の音声の比較を行った。さらに英語母語話者による聴取評価を実施し、日本人の英語音声における単音、プロソディ、感情表現、全体的印象という 4 つの側面を 5 段階で評価した。

(3) L1 と L2 によるライティングの比較

日本人被験者の感情が日本語と英語でどのように表現されるかを観測するため、日本人英語学習者により産出された英文手紙と和文手紙を、機能言語学の枠組みから提案された Martin & White (2005) のアプレイザル理論を用いて分析し、それぞれの言語における感情表現の言語特性を観測、比較した。

アプレイザル理論において評価表現は、attitude、engagement、graduation という 3 つのカテゴリーに分類される。attitude は書き手・話し手が周囲に対して付与する感情や情緒的な価値を表すものに対し、engagement は書き手・話し手の意見を様々なスタンスにより表現するものである。一方、graduation は、書き手・話し手が、評価を高めたり低めたりする表現が該当する。感情表現は attitude に該当するため、本研究では attitude のみに着目した。

attitude は評価極性（positive/negative）に加えてさらに、affect、judgement、appreciation の 3 カテゴリーに分類される。affect は、感情を基準とした情緒的反応、judgement は道徳的基準に基づいた人の行為に対する評価、appreciation は美学的基準に基づいた事象に対する価値をそれぞれ表している語句が評価表現として当てはまる。さらに affect は、幸福感に関する評価（happiness）、精神的安定性に関する評価（security）、満足度に関する評価（satisfaction）という３種に分類される。judgement は、個人の世評に関する評価

（social esteem）、社会的規範に関する評価（social sanction）に分けられ、social esteem は能力の評価（capacity）正常性の評価（normality）、信頼性の評価（tenacity）、道徳的評価（propriety）、誠実性の評価（veracity）に細分化される。appreciation は、反応を表す評価（reaction）、事象の構成に対する評価（composition）、事象の価値に対する評価（valuation）に分類される。反応を表す評価（reaction）は、話し手・書き手に与える影響（impact）と事象の性質（quality）、事象の構成に対する評価（composition）はバランス（balance）と複雑性（complexity）に細分化される（図1）。

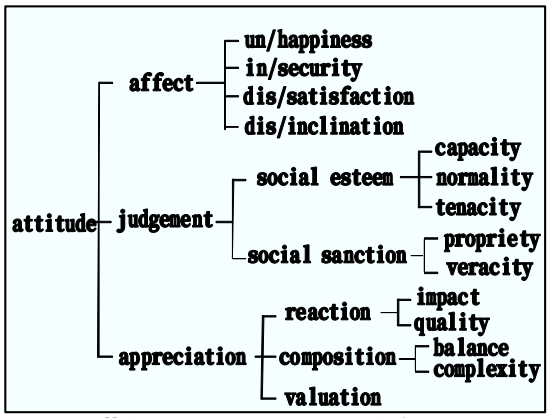

図１　英語における attitude の評価システム（Martin & White, 2005）

図１の評価システムは英語を対象に構築されているため、和文手紙の分析においては日本語の評価表現の価値基準を構築したシステムであるJAppraisal（佐野、2012）を採用した。JAppraisal では、最初に、評価表現の価値基準を「極性」と「内外評価」に分類する。これらの2 つのカテゴリーは、同時に選択する必要がある。「極性」は、「肯定」「否定」に分類され、「内外評価」は「内評価」と「外評価」に分類される。「内評価」は評価者が抱く感情表現であるのに対し、「外評価」は、評価対象の特徴を付与するものとなる。「内評価」は更に、感化されてわき起こる感情・行為を表すものである「受動」と、評価者が評価対象を自己の精神世界に位置づけることで生じる感情である「能動」に分類される。「受動」の性質をもつ評価表現は、更に心の状態を表す安心・安堵・気楽さ・心配・不安・動揺等を基準とする「情動」と、評価者の心の出来事を基準とした嬉しさ・楽しさ・感動・怒り・悲しみ等の「心情」の2つのカテゴリーに分類される。一方、「能動」の性質をもつ評価表現は、「希求」と「満願」に分類される。「希求」は、評価者の趣向・好みと評価対象との一致を基準とする愛情・欲心・惜しみ・恨み・疎み等の表現であり、「満願」は、目的の達成度・満足度や評価者の規範と評価対象との一致を基準とする満足・信用・賛同・不平・不信・軽蔑等の表現である。

「外評価」は2 つのグループに分類される。一方のグループは「相対」「他動」「自律」の3 種類に分類され、他方のグループは「境界」と「非境界」の2 種類に分類される。これらの2 種のカテゴリーは同時に選択することが可能である。「相対」は、比較対象との評価対象の位置づけからの特徴を、「他動」は、評価対象が他の要素へ与える物理的・精神的な影響を、「自律」は評価対象の個としての特徴をそれぞれ基準とする。一方、「境界」は人間活動の主体・行動・生産物に適用可能な特徴、「非境界」は、上記以外にも適用可能な特徴、或いは自然界の事象にのみ適用可能な特徴に関する表現となる（図2）。

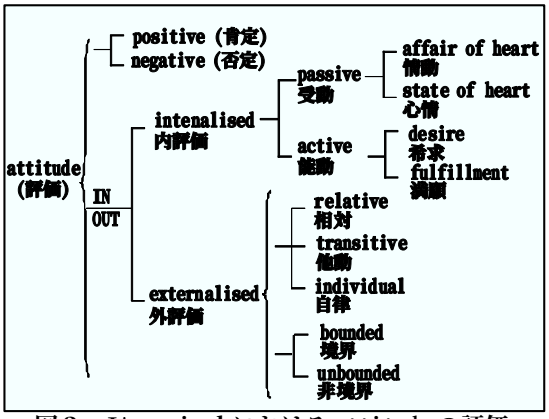

図２　JAppraisal における attitude の評価システム(佐野, 2012)

本研究の早い時期に十分なデータがそろっていたことから、先行研究で使用したラブレターとお悔やみの手紙を分析対象とした。日本人英語学習者 7 名による英語と日本語の手紙 2 種、計 28 テキストを分析した。

４．研究成果

(1) ライティング実験

課題 1、2 ともに、米語母語話者による英文手紙と比較した結果、日本人英語学習者においてライティング熟達度と TOEIC スコアとの相関関係や、感情表現の習得度と TOEIC のスコアの相関関係を示唆する傾向が観察された。また、英語母語話者による手紙とは異なる英文のパターンも観測された。現在、より詳細な特徴を引き続き観察中である。

(2) スピーキング実験

日本人学習者の感情表現においては、プロソディの中でもピッチの重要性を示唆する傾向が観測された。米語母語話者の音声との比較・分析を引き続き行っている。

(3) L1 と L2 によるライティングの比較

英語によるラブレターにおける評価表現数は 169、お悔やみの手紙は 184 であった。それぞれの手紙の分析結果を図３および図４に示す。ラブレター、お悔やみの手紙ともに肯定的な表現が否定的な表現よりも多く使用されていた。affect、judgement、appreciation の 3 カテゴリーの中では、

affect が１番多く、書き手の情緒的反応を表す表現が多く観測された。judgement と appreciation については、ラブレターでは使用頻度がほとんど同じであったのに対し、お悔やみの手紙では judgement の割合が高く、亡くなった先生の人柄や言動を描写する表現が多く観察された。

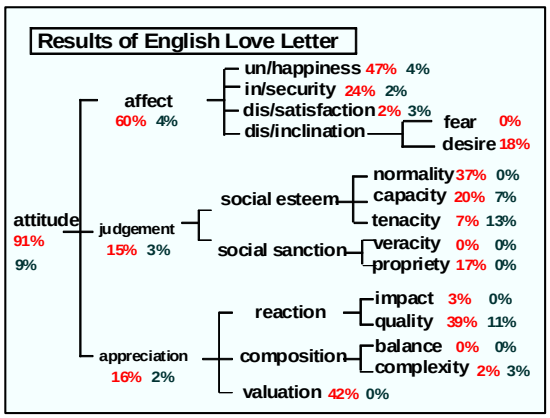

図３　英語によるラブレターの評価結果

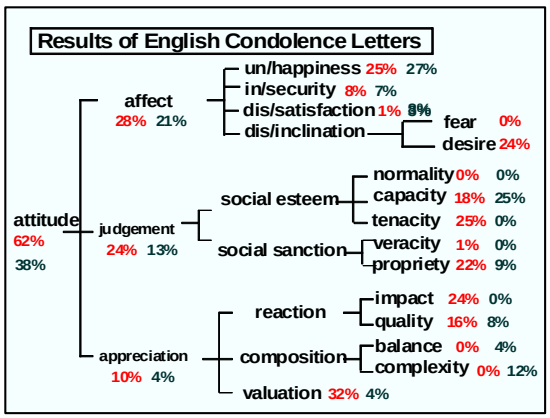

図４　英語によるお悔やみの手紙の評価結果

日本語によるラブレターにおける評価表現数は122、お悔やみの手紙は101であった。それぞれの手紙の分析結果を図５および図６に示す。

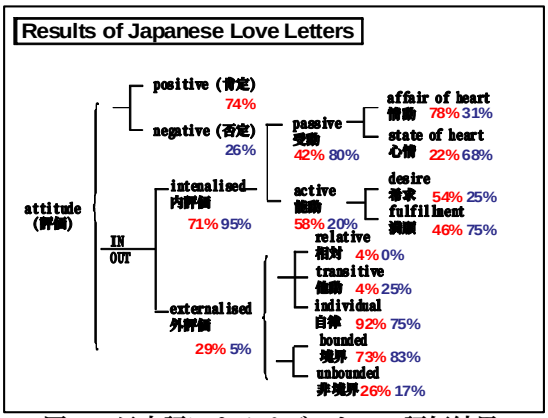

図５　日本語によるラブレターの評価結果

ラブレターにおいては肯定的な表現が否定的な表現よりも多く使用されていたが、お悔やみの手紙においては肯定が 55%、否定が 45%であり、顕著な差異は観測されなかった。「内評価」と「外評価」については、どちらの手紙においても「内評価」の割合が高く、書き手の気持ちを表す表現が多く観測された。また、ラブレターでは自分を卑下する表現が使用されていたが、この特徴は英語では観測されなかった。一方、お悔やみの手紙では決まり文句が多用されていた。

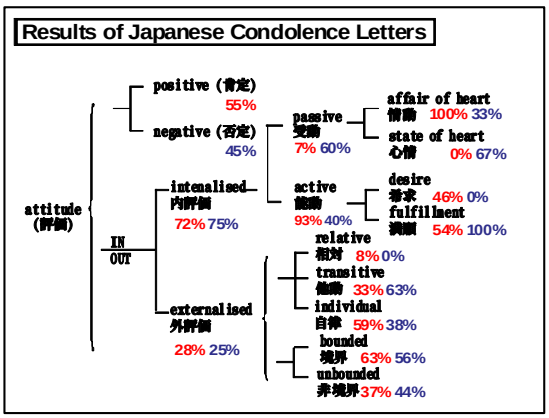

図４　日本語によるお悔やみの手紙の評価結果

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

① Kaneko, I. (2012). An Appraisal analysis of emotional expressions in English letters by first and second language writers. *Theory of Information Culture, 10,* 50-61.（査読有）

〔学会発表〕（計２件）

① Kaneko, I. & Mizusawa, Y. (2013). An Appraisal analysis of emotional expressions in first and second language writings by Japanese learners of English. ASFLA National Conference 2013, Oct. 3, 2013, Australian Catholic University.

② 金子育世 (2014).「日本人英語学習者による感情表現～第二言語習得の観点から～」第 12 回愛媛大学英語教育改革セミナー（招待講演） 2014 年 3 月 13 日、愛媛大学

６．研究組織

(1)研究代表者

金子　育世（KANEKO, Ikuyo）

順天堂大学・スポーツ健康科学部・准教授

研究者番号：００３６０１１５

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし